VI 特論

本能寺の変と松倉・魚津城

一 はじめに

天正十年六月の織田軍と松倉・魚津城に拠る上杉軍との戦いについては、残された両軍の史料により、これまである程度の実態が判明している。ただし、松倉城に言及した史料は極めて限定され、また魚津城陥落直後、織田諸将が本国へ撤退に移るまでの動向など、不明な点も残されていた。

そうしたなか、藤田達生氏が著書『天下統一』(平成二十六年四月刊)の中で柴田勝家が魚津城から越前へ撤退後に書いた新出の書状(1)を紹介され、本能寺の変前後の松倉・魚津城と織田軍の動向を明らかにされた。本稿では、この柴田勝家書状を中心に当時の両城の状況や織田軍の動向などについて述べてみたい。

二 松倉城からの上杉軍撤退

書状は二点あり、Aは六月十日付で丹羽長秀家臣の粟屋五郎左衛門尉に宛てたもの、Bは後欠だが、内容から六月十二日以降に同じ粟屋五郎左衛門尉に宛てたものとみられる。まず前者から見てみる。

(A)悉属存分候処、此儀付而、彼面(魚津)仕置共堅固ニ申付口、佐内蔵(左々成政)者越中、前又左(前田利家)能州、我等者昨日九日、至越前北庄帰陳候、惟五郎(丹羽長秀)左大坂在番儀候条、各被示合、其国(若狭)慥御抱此時候、隣国儀候間、御用儀不可有疎意候、

(中略)

六月十日　勝家(花押)

粟屋五郎左衛門尉殿

御宿所

これは魚津城陥落後、本能寺の変報を聞いた勝家が、魚津方面の仕置を堅く命じたこと、佐々成政は越中に残り、前田利家は能登へ、勝家自身は九日に越前北庄に帰陣したことを述べる。また「惟五郎左大坂在番儀候条」とあることから、変の当時、丹羽長秀は(織田信澄と共に)大坂にいたことが知られ(2)、今は長秀の領国である若狭を粟屋が他の家臣らと連携を取って確保することが大切だと伝えている。粟屋氏はこの時点で若狭にいたとみられる。

次に後者の書状を掲げる(但し、全体が長文のため、越中関係の部分に限定)。

(B)一、自是雖申猶令啓候、越後表之儀、長尾喜平次(上杉景勝)為後巻近々与取出、在陣中ニ松倉を乗取候、其夜喜平次敗北候条、小津城去三日卯刻乗崩、城中不洩一人茂二千余討果、其内大将之首共進上候、其刻くろ(黒部)べを指過、堺城及行之処、五日夜退散候、其より切所〳〵を拘城共何茂北破候処、六日此一義注進候間、前又左・佐内蔵令相談越中仕置仕、佐内蔵ハ彼国相踏、又左ハ能州、拙者至北庄ニ九日ニ帰陣候、十日方々傳候を相調、則存分共申越事

ここでまず注目したいのは、冒頭の松倉城に言及している箇所である。「長尾喜平次為後巻近々与取出、在陣中ニ」とあるのは上杉景勝が魚津城救援のため、同城の北東にある片貝川右岸の天神山城に陣取ったことを指す。続いて勝家は景勝が在陣中に「松倉を乗取候」、すなわち攻め取ったとしている。

しかし、事実は少し違うようである。ここで次の前田利家書状を見ておきたい。

(C)態以飛脚令申候、仍昨日廿六松倉明退、同夜子刻喜平次退散候、当城(魚津城)者未相踏候、乍去城内尚以つまり申候、近日可為落居候、弥無相替儀候之間、可御心安候、猶自是可令申候、恐々謹言

又左

五月廿七日　利家(花押)

五郎兵衛尉殿（前田安勝）
御宿所(3)

これは魚津在陣中の利家が、国許・能登七尾の兄安勝(五郎兵衛)に宛てた戦況報告であるが、冒頭に「仍昨日廿六松倉明退、同夜子刻喜平次退散候」と記し、上杉勢が五月二十六日に松倉城から撤退したことを伝えている。「明退」とあるのは、上杉勢が自ら城を出て、撤退したことを示しており、B史料で勝家が「松倉を乗取候」、すなわち攻め取ったように記すのは、対外的に誇張した表現だったとみられる。

この頃、魚津・松倉城の状況はどうであったか。実は、包囲下にある魚津城の方は、二の丸が五月六日の時点で織田方に奪われており、「本城」(本丸)だけになった裸城の状態であり、極めて切迫した情勢だった(4)ことが知られている。これに対し、松倉城の方は織田軍との戦闘を示す一次史料がほとんど残されていない。史料の残存状況だけで判断することは危険だが、当時の主戦場は魚津城周辺であり、松倉城周辺では両軍とも積極的に動かず、小競り合い程度で対峙のまま持久戦を図っていたと考えられる(5)。

ちょうどその時、景勝の許に織田軍が越後へ進攻したとの報せが届いた。春日山城を脅かす事態に直面した景勝は、直ちに主力の越後帰陣を決断せざるを得なかった。見捨てられた形の魚津城が最悪の事態を迎えることは不可避である。となれば、松倉城の城兵だけは魚津の二の舞いになることを避ける必要がある。このため、景勝はまず二十六日、松倉から城兵を山越えに天神山まで撤退させ、本隊に合流させたのち、同日深夜に越後へと引き揚げたとみられる。『越後治乱記』(『越佐史料』所収)もこの間の経緯を次のように記している。

(D) 信州海津の城主森勝蔵、越後へ乱入、さかいの田切を押破り、二本木・関の山・片貝・野尻・藤巻辺迄十四ヶ村放火して、其日の中に引退くと注進す、新発田籠城して居たるさい心元なきに、又、御留守へ敵の入けるよし告来れは、御供の上下弥胸をひやしける、去ハ御帰陣有へし、乍去魚津・松倉の者共を引取てこそと有けれ共、魚津の城ハ十重廿重に取巻れて堅固にかこみけれは、打ちらして引取へき様もなし、松倉斗も助よとて、使者を立、其地を明て当陣へ参候へき由仰被遣たりけり、此松倉の城は、川田豊前守死去の後、番手にて勤たりしか、其時の在番黒金上野介・須田相模守・岩井備中守・菅名但馬守・楠川和泉・上野九兵衛なり、各仰に任せ、松倉の城明て御陣へそ参ける、魚津の者共不便成共、信州口おほつかなしとて、五月廿七日に天神山を引払へ、越後へ帰陣せられたり

後世の史料ではあるが、魚津が極めて厳重な包囲下にあって救出が困難であったこと、松倉の城兵だけでも助けようと使者を送り、城を捨て天神山の陣まで撤退させた様子が知られ、興味深い。前掲のC史料はほぼこの記述を裏付けている。

この結果、城兵の退去を知った織田軍は直後に空城となった松倉城へ入り、同城を手に入れたことになろう。やはり後世の史料ではあるが、加賀藩士富田景周の『越登賀三州志』には、松倉城を奪った状況を次のように記しており、参考までに掲げたい。

(E) 松倉の守兵城上に旌槍を羅列し、守禦の形勢を伴りなして、夜越後へ走る。織田方の諸将之を知らず、妄に近づかずと云ふ。我が公は然らずとし、単騎にて城下に到つて見量らひ玉ふに、果して空城也。因つて一箭の費なくして斯の城を得たり。

単騎で城下に乗り込むなど、いかにも前田利家の智将・勇将ぶりが際立つ話だが、真偽のほどはわからない。ただ、城兵が撤退を悟られぬよう、旗や槍を城内に並べ立てたとしている点は、古典的な常道とは言え、事実であったかも知れない。それにしても、対峙・監視状況のなか、山陰から山間を縫うように密かに城兵を天神山まで撤退させることは大きな危険が伴ったことであろう。ルートの詳細は不明だが、一つの推測としては、松倉城裏(東側)の谷筋から坪野城・大菅沼・島尻を経て片貝川を渡り、右岸沿いに天神山に入ったとも考えられる。

ともかく、ここまでの検討から、勝家が「松倉を乗取候」と述べているのは、いささか対外的に誇張した表現だったことが知られよう。松倉城につい

ては、従来、C史料により上杉勢の撤退のみが知られていた。しかし、今回の勝家書状(B史料)によって織田方が直後に一部の軍勢を入れて松倉城を確保したことが明らかになった。なお、城兵の撤退後、同夜景勝が天神山から引き揚げたことは、勝家が「其夜喜平次敗北候」と述べているとおりであり、C史料の前田利家書状の内容とも合致する。

三　魚津城の陥落

Bの勝家書状によれば、援軍を断たれた魚津城は「去三日卯刻乗崩、城中不洩一人茂二千余討果、其内大将之首共進上候」となった。すなわち、六月三日の卯の刻(午前六時)に織田勢が突入し、城中にいた者を一人も洩らさず、二千人余を討ち果たしたという。突入の日時については、六月五日付の佐々成政書状(6)に「仍一昨日三日卯刻小津城へ乗入」とあるのに合致し、城兵についても「大将分十三人、其外城中ニ籠候者一人も不残悉討果申候」とあって、やはり一人も残さず討ち果たしたとしている。

写真20　上杉景勝が本陣を置いた天神山(手前は片貝川)

ただし、成政書状には討ち取った城兵の人数を記さないが、勝家は「二千余」としている。陥落時の城兵の数については、一次史料でこれまで記した史料がないものの、本丸だけの一郭を残すのみで、果たして二千人余も籠っていたかどうかは疑問である。せいぜい数百人程度の数だったとみられるので、この点は対外的に誇張して記したのであろう。

次に注目されるのは、勝家が「大将之首共進上候」と記している点である。守将の数は、成政書状によれば十三人であり、彼らの首が落城後に「進上」されたのである。これら十三人の守将の名は、同年四月十三日付の景勝書状と二十三日付の守将らの連署状(7)から、中条景泰・竹俣慶綱・吉江信景・同宗閣・寺嶋長資・蓼沼泰重・藤丸勝俊・亀田長乗・若林家吉・石口広宗・安部政吉・三本寺景長・長与次であったことが判明する。

首の献上は、今回初めて明らかになった点である。守将の首の献上は敵城攻略の証であり、勝家は最大の任務であった魚津城攻略を果たした証として、上方の主君信長の許へ最優先で送ったに違いない(8)。だが、上方はまもなく一大混乱の渦の中に巻き込まれ、使者が信長に見えることは叶わず、無論、首の行方についても一切不明である。

ところで、勝家・成政共に魚津城の攻略時に城兵を一人残らず討ち果たしたと述べているが、事実であろうか。実は後世、地元の伝承なども含め書き記した『越中四郡古城跡略記』(9)によると、攻防戦は最終的に「扱い」(和談)が成立し、上杉方が本丸を明け渡して退去することになっていたという。

同史料には、この時の明け渡しの模様を「地侍之分者本丸橋より出シ、越後勢ハ明ル日大手ら門川ノ方へ出シ、跡先ら取つゝミ、不残討申由」と記し、城内にいた将兵の内、地侍(越中の侍達)は一日早く退城し、越後の者達だけが翌日退城したところを織田方が包囲して一人残らず討ち取ったと伝えている。このことは成政書状に次郎右衛門が人質として城内に入り、切腹したことを記しているので、恐らく事実であろう。その背景には、信長による城兵討滅の強い指示があったことも見逃せない。

四　越後国境への進撃

今回の勝家(B)書状の中で最も注目されるのは、魚津城陥落直後の織田軍の動きである。これまでは、本能寺の変報が届いたところで、柴田・前田らが急ぎ国許へ戻ったこと以外は知られていなかった。同書状によれば、陥落後「其刻くろべを指過、堺城及行之処、五日夜退散候」とあって、北の黒部川を越え、「堺城」まで兵を進めたところ、五日の夜、守る上杉勢が城を捨て撤退したと述べている。

「堺城」(境城、別名宮崎城。現朝日町)とは越中東端の山城で、越後国境の要衝として知られる。そうであれば、柴田らの織田軍は魚津城攻略後、間を置くことなく越後国境に向け進撃を開始したことがわかる。時間的に見て、

魚津城を落とした翌日の四日か翌々日の五日であろう。このことは、その少し前まで天神山城に一部の上杉勢が残留し、陣取っていた可能性を示している。そのため、織田軍は景勝の撤退(五月二十六日夜)を追撃できなかったとみられる。

しかし、六月四日か五日に織田軍が堺城へ向け進撃したということは、天神山城に残留していた上杉勢がすでに退去していたことを物語っている。とは言え、さすがに国境の堺城にはまだ上杉勢の一部が城を守っていた。だが、それも織田勢の勢いを見て、五日夜中に越後へ退いたのであろう。その後は「其より切所〳〵を拘城共何茂北破候処、六日此一義注進候間」とあって、要害となる上杉方の城はどれも守兵が逃れてしまったことを述べている。この時点で織田軍は越後に突入寸前だったことがわかる。だが、翌六日になって、ついに本能寺の変報がもたらされたのである。

報せを聞いた勝家は直ちに本国越前へ引き揚げた。北庄城に着いたのは九日であったという。引き揚げ前に前田・佐々との善後策の協議が行われ、越中の仕置は成政に任せて利家は能登、勝家は越前へ帰陣することになったという。

写真21　堺城（別名　宮崎城）跡遠望

五　おわりに

以上、新出の柴田勝家書状を中心に越中松倉・魚津城をめぐる本能寺の変前後の状況を見てきた。今回の新出史料により明らかになった最大の点は、織田軍が魚津城を攻略後、そこで留まることなく越中東端の堺城へ進撃し、五日夜にはそこを奪って越後国境に達したことであろう。まさに織田軍は越後突入寸前だったわけだが、本能寺の変という大事件により、後を任された佐々成政はまもなく魚津城攻撃以前の状況に引き戻されるのである。

末尾ながら、今回の勝家書状に関し、懇切に紹介いただいた藤田達生氏に謝意を表したい。

註

(1) 宮下玄覇氏所蔵。平成二十四年に織田信長展実行委員会が発行した岐阜市歴史博物館展覧会図録『織田信長と美濃・尾張』に写真掲載。

(2) 藤井譲治編『織豊期主要人物居所集成』。

(3) 前田育徳会所蔵『富山県史』史料編Ⅲ、四〇号。

(4) 五月九日付前田利家書状に「仍当城二丸去六日乗崩、本城計罷成候」(前田育徳会所蔵『富山県史』史料編Ⅲ、三九号)とある。

(5) 高岡　徹「松倉城」(『魚津戦国紀行―城と文書が語る魚津の戦国史―』魚津市教育委員会)参照。

(6) 佐野氏旧蔵『富山県史』史料編Ⅲ、四一号。

(7) 前者は反町英作氏所蔵『上越市史』別編二、二三四八号。後者は山形大学付属図書館所蔵『上越市史』別編二、二三五九号。

(8) 織田の部将が敵城攻略後、城主の首を信長に「進上」する例はよくあった。たとえば、天正五年(一五七七)秀吉が播磨上月城を攻略した際や、同八年播磨三木城を攻略した際、また同十年織田信忠が武田方の信濃高遠城を攻略した際など、いずれも城主の首が信長の許に進上されている(『信長公記』)。

(9) 金沢市立玉川図書館所蔵。